頭山満

頭山満言志録

書肆心水

頭山満言志録　目次

Ⅰ　西郷隆盛論

大西郷遺訓を読む……13

大西郷遺訓（15）

頭山満講評（63）

英雄を語る　西郷南洲……177

大西郷と自分（177）征韓論の真相（182）故山における大西郷（184）

Ⅱ　立雲談叢

自己を語る …… 191

立雲という号（191）俺は若い（192）水泳ぎ（192）俺の子供の時分（194）青年期の東京生活（198）洋服着た写真（200）薪売り（202）箒売り（203）新聞の創刊（204）山（206）高場塾（209）親（211）俺の病気（214）覚へて居る程の事は（216）

人物・逸話 …… 217

西行（217）中江兆民（220）金玉均（222）井上馨と鳥尾小弥太の人種改良議論（223）勝と岩倉（225）狂志士藤森天山（226）荒尾精には面白い話がある（228）隈の案内に犬（233）

時評・訓話 …… 234

亜細亜の殖民地（234）支那の出兵（236）支那の留学生（237）英米と償金（240）朝鮮統治（240）釜入りなんぞは至極面白からう（241）立派で危険な建物（243）成り金よりも成り人ぢや（245）多勢は要らぬ、一人でいゝ（246）鼻くえ猿（247）主とする処が違ふ（248）金で割に合ふ位の命では安いものぢや（250）済まぬと思ふ丈けがいくらか済む（252）無人の境（254）人の一生（254）優さしきものあつて初めて敵なし（255）三つの幸福（256）死んだら（256）誠（257）神（257）

（附）頭山満先生 …… 夢野久作 259



頭山 満

安政 2（1855）生
昭和 19（1944）歿

頭山満言志録

凡例

一、書名「頭山満言志録」は本書発行所によるものである。夢野久作の文章は「解説」文として付録した。

一、収録内容の底本は次の通り（本書の章立てと章題は本書発行所によるものである）。

＊「**大西郷遺訓を読む**」――立雲頭山満先生講評、鹿野雅賀博愛筆記（政教社編）、『改訂増補　大西郷遺訓』、政教社、昭和十六年十二月五日二十一版発行（大正十四年三月十日初版発行）の全文。「大西郷遺訓」の部分は写真版で収録した。

＊「**英雄を語る　西郷南洲**」――頭山満述、吉田鞆明記、『英雄ヲ語ル』、時代社、昭和十七年九月十九日発行。「西郷南洲」の章より『改訂増補　大西郷遺訓』との話題重複を避けて抄録した（小見出しの文言は一部変更した）。

＊「**立雲談叢**」――柴田徳次郎編、『頭山翁清話』、大民倶楽部、大正十二年五月十日五版発行（大正十二年四月二十日初版発行）および、同編者同書名（大民文庫版）、大民社出版部刊、昭和十五年十二月二十八日初版発行。右項二者との話題重複を避け、かつ、頭山満が自身を語っているもの、頭山満の考えがとりわけよく表れていると感じられたものを選択し抄録した。「自己を語る」「人物・逸話」「時評・訓話」の括りは本書発行所が設け、これにより談話の配列も按配した。小見出しの文言はこの括りとの兼ね合いなどから変更したものがある。昭和十五年刊の文庫版は増補改訂版であるが、それより採用した談話は冒頭の二篇のみ。

＊「**（附）頭山満先生**」夢野久作著――夢野久作著、西原和海編、『夢野久作著作集5』、葦書房、平成七

年二月二十五日初版発行所収、「頭山満先生」の全文（初出は『日本少年』昭和十一年一月号～四月号の四回連載。これは夢野久作歿年の作品である）。

＊なお、大正時代から昭和十年代にかけて頭山満の談話を編んだ書物は右記以外にも少なくないが、重複する話題が多く、また基本的に同じ本と言えるものもある。（例えば、『胆もつ玉』大正六年、『西郷南洲先生』昭和三年、『胆つ玉英雄風雲録』昭和四年、『重大国事の秘密を語る』昭和十一年、『胆つ玉』昭和十三年、『日本精神と腹』昭和十四年、『頭山翁警世百話』昭和十五年、『頭山満翁語録』昭和十八年、など。これら、および同名書物の別版においては、同じ談話でも細部の違いや時局を反映したようなニュアンスの違いが見られる）。

一、『大西郷遺訓』については、底本の「改定（ママ）増補版凡例」（本書十四頁）に記されているように、西郷隆盛の遺訓は初版と改訂増補版では別のものが収録・引用されている（初版は山路愛山編『南洲全集』の写出で、改訂増補版は荘内藩士の筆録原本の写出）。本書において『大西郷遺訓』の底本は改訂増補版としたが、頭山満が講評した西郷隆盛の遺訓は山路愛山編『南洲全集』の写出であることから、西郷隆盛の遺訓については初版収録のそれを使用すべきかと検討したが、改訂増補版において頭山満の講評文に手が入っていることもあり、西郷隆盛の遺訓も改訂増補版収録のものを使用した。

写真版で収めた「大西郷遺訓」と「頭山満講評」部分の遺訓引用では句読点・濁点表記に多少の異同が見られたが、この点については以下のように対応した。「講評」部分の遺訓引用において、句読点は底本のままとし、濁点は現代風に補った。

本文中の誤植らしきもののうち、初版に照らした結果、全篇新組の改訂版における誤植と判断されたものは初版によって訂正した。

一、仮名遣いは（不統一含め）底本のままとし、漢字は新漢字に置き換えた。また、頭山に属する文章に

ついては、句読点を加減したところが多少ある。

一、『　』と「　」は現今一般的な用法（会話・引用等は「　」、書名・紙誌名・文献名等は『　』）に置き換えた。また、「　」括りの会話文の前後等、改行を幾分省略した。

一、読み仮名ルビは底本のもの以外にも便宜的に補った。読み仮名ルビについては底本のものも含めて現代仮名遣いで表記し、拗促音表記を使用した。読み仮名ルビを付したのは、現今頻用されない語句と用字、当て字、送り仮名が今風でないが故、および旧仮名遣いであるが故に読みにくいと思われるもの、画数が多く視認しにくい嫌いのあるものなどである。漢文訓点（の有無）は基本的に底本の通り。

一、ママのルビ（原文のママの意）と、（　）括りの注釈ルビ、および行内の（　）括り二行割注は、蛇足ながら本書発行所が一つの参考までに附したものである。二行割でない行内の（　）注釈は底本のものである。

一、正字のうち、用字としては現今違和感のあろうものを、略字で置き換えた場合がある（著る→着る、など）。

（著者および底本関係各位に謹んで深謝申し上げます。書肆心水）

Ⅰ

西郷隆盛論

大西郷遺訓を読む

改定増補版凡例

一、本書（玖教社刊行『大西郷遺訓』）刊行は巻末附記「大西郷遺訓と講評」に明らかなる如く大正十四年三月、初版刊行爾来版を重ねること廿三回に及べるものなるが今や我日本帝国は日支事変より大東亜戦争へと進展せる際、茲に内容に根本的改定増補（奥付表記は「改訂増補」）を加へ、非常時局の現代人士に必読の修養書として改めて刊行するものである。（初版との異同において、戦時性を鑑みての「根本的」改定増補と感じられるほどの多量の変更は見られなかった）

一、本書初刊に引用したる南洲翁遺訓全文は、山路愛山編『南洲全集』より写出して立雲翁に提示したるものであつたが、今改定版を出すに当り、荘内藩士の筆録にかゝる原本に照応して全文を之に改めた。

一、荘内本以外、南洲翁が子弟に訓話せられたるものや、遺訓として誦記するに足る数篇をも新たに添加した。

一、殊に南洲翁が自から記して子弟に与へられた「死生の説」は、翁の人生観の根義を示されたるものとして、不朽の文字であるので、新たに立雲翁の講評を請ひ、本書に附加して置いた。吉田松陰先生が其弟子品川弥二郎に与へられた「死生の説」を読んでも、維新勤皇志士の活動の根柢に横はれる一大基本精神が、此の「死生観」に徹しありたることを思へば、鍋嶋論語と称せらるゝ『葉隠』が、武士道の根義を教へて「死ぬことゝ見つけたり」といへるも、故ある哉と思はしむるのである。

一、此書世に出でゝ既に十七年。年と共に世に愛読せらるゝのは、大西郷の人格の千古に朽ちざるものあると、之を講ずる頭山立雲翁の至評の、適として肯綮に中るものあるが為である。遠く南洲翁の英魂に謝し、近く立雲翁の愈々健在ならんことを祈り、茲に改定増補版を世に問はんとするものである。

昭和十六年九月

大西郷遺訓

一、廟堂に立ちて大政を爲すは、天道を行ふものなれば、些とも私を挟みては濟まぬもの也。いかにも心を公平に操り正道を踏み、廣く賢人を撰擧し、能く其の職に任ふる人を擧けて政柄を執らしむるは、即ち天意也。夫れ故眞に賢人と認る以上は、直に我か職を讓る程ならては叶はぬものぞ。故に何程國家に勳勞有るとも、其の職に任へぬ人を官

職を以て賞するは、善からぬことの第一也。官は其の人を撰びて之れを授け、功有る者には俸祿を以て賞し、之れを愛し置くものぞと申さるるに付き、然らば尚書仲虺之誥に、德懋んなるは官を懋んにし、功懋んなるは賞を懋んにすると之れ有り、德と官と相ひ配し、功と賞と相ひ對するは此の義にて候ひしやと請問せしに、翁欣然として、其の通りぞと申されき。

一、賢人百官を總へ、政權一途に歸し、一格の國體

を知らう様がない。それぢやに因つて、生と死と云ふ譯がないぞ。さすれば生きてあるものでないから、思慮分別に渉ることがない。そこで生死の二つあるものでないと、合點の心が疑はぬと云ふものなり。この合點が出來れば、これが天理の在り處にて、爲すことも言ふことも、一つとして天理にはづることはなし。一身が直ぐ天理になりきるなれば、是が身修ると云ふものなり。そこで死ぬと云ふことがない故、天命の儘にして、天より授かりしまゝ

で復すのぢや。少しもかはることがない。ちょうど、天と人と一體と云ふものにて、天理を全ふし終ふしたと云ふ譯なればなり。

（畢）

頭山満講評

立雲　頭山満翁講評
政教社　編

一、廟堂（朝廷。天下の大政を司る所）に立ちて大政を為すは、天道を行ふものなれば、些とも私を挟みては済まぬもの也。いかにも心を公平に操り、正道を踏み、広く賢人を撰挙し、能く其の職に任ふる人を挙げて、政柄（権政）を執らしむるは、即ち天意也。夫れ故真に賢人と認る以上は、直に我が職を譲る程ならでは叶はぬものぞ。故に何程国家に勲労有るとも、其の職に任へぬ人を、官職を以て賞するは、善からぬことの第一也。官は其の人を撰びて之れを

授け、功有る者には俸禄を以て賞し、之れを愛し置くものぞと申さるるに付き、然らば尚書仲虺之誥に、徳懋んなるは官を懋んにし、功懋んなるは賞を懋んにすると之れ有り、徳と官と相ひ配し、功と賞と相対するは、此の義にて候ひしやと請問せしに、翁欣然として其の通りぞと申されき。

（註）尚書仲虺之誥云々引用の原文は次の如くである。『尚書』は『書経』、仲虺は湯王の左相である。

仲虺之誥（尚書巻之三商書）

惟王不レ迩二声色一。不レ殖二貨利一。徳懋懋レ官。功懋懋レ賞。用レ人惟己。改過不レ吝。克寛克仁。彰二信兆民一。

【立雲先生曰く】南洲翁に遺訓があるといふことは兼ねて耳にして居つたが、之を見るのは今が始めてゞある。一読して偉大なる翁の人格に面の当り接するやうな思ひがする。こゝに記されたのは、翁日常の片言隻句に過ぎまいが実に大したものぢや。これだけのことが完全に行はれてゐたら、上に　明治天皇の在はすあり、今少し日本も立派なものになつてゐたであらうに、後年、政治家に其の人を得ず、寔に残念なことが多かつた。此の中の一箇条でも、

完全に行はうとすれば、容易ならぬ努力と決心と練磨とが要るのぢや。然るに此の全部が南洲翁の人格であつたかと思ふと、実にその偉大さが思ひやられる。能く翁の申さるゝところを熟読翫味して、君国の為めに赤誠を捧げなければならぬのぢや。

「真に賢人と認る以上は、直に我が職を譲る程ならでは、叶はぬものぞ」といはれてゐるが、こゝが肝腎のところぢや。私の心があるから、何処までも自分の我を張らうとしたり、自己の勢力を維持したりしようとするのぢや。見玉へ、近時非常時国難といふのに、見るに忍びない政争や行詰りは皆な、賢人と認むれば、何時でも我が職を譲らうとする誠心がないからぢや。

「官は其の人を撰びて之れを授けよ」というて居られるが、翁の深い用意のほどが、此の辺でも察せられるのぢや。これに就いて、丁度思ひ出すことがある。西郷従道さんが、或る時のお話に、

「隆盛がよく申して居りましたが、大隈重信には、教育のことを授けてはならぬ。又た井上馨には、決して財政のことを任せてはならぬ、とかやうに申して居りました」

とのことぢや。然るに大隈の一生を見ると、政治家といふよりも教育家として有名になつて

居るし、又た一方の井上は、明治の財政家として、自からも任じ、人も推すやうになつてゐる。こゝに南洲翁が、人物を見らるゝに、独特の眼光を持つて居らるゝことがわかるのぢや。南洲翁の意中を忖度して見たら、大隈は心に誠が足らぬ、誠の足らない者に、天下風教の源であり、且つ人倫の大本を教ふる、教育家の任務を託すべきではないと思はれたものと察せられる。井上には、南洲翁が或る時、

「井上さん、あんたは三菱の番頭になられてはどうでごわす」

といはれたことがあるさうぢや。井上は金を溜めることは知つて居ても、公私の別あることを知らぬ。公私の別を知らぬ人間に、苟も皇室の御財政、延いては、国家財政の重任が委せらるゝものではないといふのが南洲翁の意中であつたやうに思ふ。

財政家を以つて任じてゐる井上に、国家の財政を任じてはならぬといひ、大教育家として許されてゐる大隈に、教育のことは委せられぬといはれた南洲翁の眼光は、遥かに俗眼を抜いてゐるものがあるヨ。

一、賢人百官を総べ、政権一途に帰し、一格の国体定制無ければ、縦令人材を登用し、言

路を開き衆説を容るるとも、取舎（旧取捨）方向無く、事業雑駁にして成功有るべからず。昨日出でし命令の、今日忽ち引き易ふると云ふ様なるも、皆統轄する所一ならずして、施政の方針一定せざるの致す所也。

【立雲先生曰く】 簡にして要を得、此の上一言も加へる必要はない。国の本体といふものが、ちやんと立つて居らんければ、すること為すこと、鵺の嘴と喰ひ違つてしまふのぢや。自分がよくいふことぢやが、政治家といふものは、善い事をして飯を食つとるものぢや。ところが近ごろザラにある政治家といふ手合ひは、善い事どころか、悪い事をして飯を食ふ者のやうになつてしまうた。大へんな料簡違ひぢや。自分らが悪い事をするくらゐなら、まだいいとしても、先に人がしておいた善い事までも、叩壊してしまふやうなことをしよるテ。

政党内閣なんていふものも、今では昔話になりかゝつてゐるが、一廉人民の為めになるばしのごと吹聴して来たものだが、見玉へ、誰れが人民の為めになることをしたか。皆んな党利党勢で、己れ等が党派の地盤ばかりしか考へては居らぬ。それで後から内閣を取つたものは、必らず前の内閣のやつたことを覆へしてしまひよる。そしてそれを一廉の手柄ばなしの

ごと吹聴しよるテ。見られたものぢやありやせん。

南洲翁が「昨日出でし命令の、今日忽ち引き易ふるといふ様なるも、皆統轄する所一ならずして施政の方針一定しないからぢや」といはれたのは、今日の政弊に見事に適中しとる。何もクド〳〵いふことはいらんから、此の頃の大臣に、此の一条だけでも読ましてやるがいゝ。少しは赧い顔でもすりや、まだ脈のある方ぢや。之を読んでも痛うも痒うもないやうな奴は、国の進展の邪魔になるばかりぢやから、ドシ〳〵引込ましてしまふ外はない。

一、政の大体は文を興し、武を振ひ、農を励ますの三つに在り。其の他百般の事務は、皆此の三つの物を助るの具也。此の三つの物の中に於て、時に従ひ勢に因り、施行先後の順序は有れど、此の三つの物を後にして、他を先にする更に無し。

【立雲先生曰く】 文武の両道といふことは、昔から人がいつとるが、文武農の三道としたところは、流石に南洲先生ぢや。智、仁、勇の三徳に配したところぢやのウ。百姓は国の宝で、これを度外において、国の政治が成り立つものぢやない。昔から百姓を粗末にして栄えた政

治家は一人もありはせぬ。

南洲翁の偉いところは、口でいふばかりでなく、苟くも自分でいつたことは、必ず自身で実行したところにあるのぢや。常に徳を磨き、武を練り、用がなければ国へ帰つて百姓をして居られた。知行合一の英雄とはこのことぢや。お上への御奉公がすんだら、華族でも、大官でも、サツサと郷里へかへつて、百姓をすることぢやヨ。南洲翁は、いつも口癖のやうに「百姓が一番正直でえゝ」といつてゐられたさうぢや。

一、万民の上に位する者、己れを慎み、品行を正くし、驕奢を戒め、節倹を勉め、職事に勤労して人民の標準となり、下民其の勤労を気の毒に思ふ様ならでは、政令は行はれ難し。然るに草創の始に立ちながら、家屋を飾り、衣服を文り、美妾を抱へ、蓄財を謀りなば、維新の功業は遂げられ間敷也、今となりては戊辰の義戦も、偏へに私を営みたる姿に成り行き、天下に対し、戦死者に対して面目無きぞとて、頻りに涙を催されける。

【立雲先生曰く】 此の一項目は、特に政治家にとつての名教ぢや。「家屋を飾り、衣服を

文(かざ)り、美妾を抱へ、蓄財を謀(たばか)りなば……」とあるが、これを聞いては、穴に這入(はい)りたいどころか、鋭利な刀で腸(はらわた)をゑぐられるやうな気がするものが多からうテ。従道侯も随分これで兄さんから叱りつけられたものと見える。自分が丁度この文そつくりのことを従道さんにいつて、責めつけたことがある。その時従道さんは頭を下げて、黙つて聞いて居られたが、今から思へば、丁度兄さんから叱られてゐるやうに感じられたものだらう。

従道さんばかりではない。近ごろの政治家で、堂々たる邸宅を飾らぬものが何処にあるか。それで思ひ出すのは長州の白井小介といふお爺さんぢや。此(こ)のお爺さん奇兵隊生残りの豪傑で、山県でも三浦でも、小僧のやうに叱り飛ばしたものぢや。山県なぞが、先輩の高杉東行(とうぎょう)（晋作）や久阪（久坂。以下注記略）玄瑞のことを「高杉がどうしたの、久阪がどうの」と呼び捨てに話しをしてゐると、白井は真赤になつて怒鳴りつける。

「貴様らが何ばし出来るごと、大ぎやうな口の利きやうをするな。高杉先生や、久阪先生が死んでゐられるからいゝやうなものの、若(も)し先生がたが生きて居られたら、末席にも出られたものぢやないぞヨ。貴様らとは元来人間の段が違うとるのぢや。先生らのお蔭でからに少しばかり頭を持ち上げたからといつて、偉さうに高杉が久阪がなどゝ、呼び捨てにするとは

怪しからぬ不心得ぢや。以後は気をつけて、高杉先生、久阪先生と、チヤント先生をつけて話をしろ。小僧の癖をして、失礼な口の利きかたをするなよ」

とひどくきめつけたものぢや。

その後、山県が立派な新邸を建築したと聞いた白井は、黙つては居らぬ。早速長州から飛び出して来て、綺麗に磨き立てた新邸へ下駄ばきのまゝで躍り込んだものぢや。すると山県の女房が驚いて、

「白井さん、いくら何といつても、それはあんまり酷いではありませんか」。

少々気色ばんで詰めよせると、白井はムツとしたと見えて、細君の顔を下駄の先で蹴あげたもんだ。そしていふには、

「女なんぞの知つたこつちやない。訳の分らんことをいふな。山県が少しばかり偉くなつたからといつて、こんな御殿のやうな家を建てるとは、何といふこつちや。久阪先生や、高杉先生が、命を捨てゝ働かれたればこそ、今日のやうな身分にもなれたのぢや。それを早や忘れてしまうてからに、お城のやうな家を建てゝ、殿様気取りをするとは、何といふ不心得なことぢや。どだい考へが間違うてしまうとる。馬鹿者奴がかういふ家に来るには、下駄ばき

で通つて丁度よい……」。

乱暴な爺さんもあつたもんぢやが、山県もこれには困つてしまひ、かういふ爺さんに来られては始末が悪いと思つたかして、幾らかの小遣を渡して、匆々長州へ追ひかへしたといふ話がある。遣り方は少々乱暴ぢやが、一面の真理があるテ。南洲翁の「万民の上に位するもの、己れを慎み、品行を正くし、驕奢を戒め、節倹を勉め、職事に勤労して、人民の標準となり、下民其の勤労を気の毒に思ふ様ならでは政令は行はれ難し」と喝破して居られるのは、この辺のことを戒められたのであらう。

一、或る時、幾歴辛酸志始堅、丈夫玉砕愧甎全、一家遺事人知否、不為児孫買美田、（幾歴辛酸を歴（へ）て志始めて堅し、丈夫玉砕して甎全（せんぜん＝無為に徒に身の安全を保つ）を愧（は）ず、一家の遺事人知るや否や、児孫の為に美田を買わず）との七絶を示されて、若し此の言に違ひなば西郷は言行反したるとて見限られよと申されける。

【立雲先生曰く】　此の詩は、大久保利通が堂々たる西洋館の新邸を作つたときに、南洲翁がこれを諷せられたものであるとも聞いてゐる。いづれにしても、「児孫の為めに美田を買はず」

英雄を語る　西郷南洲

大西郷と自分

大西郷は、自分より三十二歳の年長で、年代が違つて、遂に親しく其謦咳（そのけいがい）に接する機会を得なかつたのは、如何にも残念に思つてをる。

西南戦役の際、自分は二十三歳の一書生であつたが、その前年明治九年の秋、自分等は、大久保利通暗殺、政府顚覆の陰謀をなすものとして、捕へられて入獄し、翌十年九月出獄したが、其（その）時はすでに西南戦役は終結し、大西郷は空（むな）しく故山の露と消えた後であつた。

明治八年の交（頃）、自分は、女傑高場乱（おさむ）先生の人参畑の高場塾に学んでをつたが、国政改革、勤皇報国実践を念願し、同塾の進藤喜平太（後の玄洋社々長）、箱田六輔（初代玄洋社々長）、武部小四郎（西南役に呼応して斬せらる）などと矯志社を創立し、読書、修錬は勿論、堅く血盟して勤皇報国、邦家の為一身を抛（なげう）たんことを盟約した。

当時、征韓論が沸騰し、天下の輿論囂々（よろんごうごう）たる秋（とき）であつた。大西郷以下桐野、篠原などの諸豪も故山に帰臥し、大いに私学校に人才を養成中であつたのだ。

征韓論で正面衝突した大久保利通などの官憲は、決裂後の急迫せる事態と世相をいたく憂慮し、大西郷と其（その）一統は勿論のこと、佐賀の江藤新平や、土佐の板垣退助、萩の前原一誠などに対し、実に峻厳なる警戒をしたものだ。従つて、自分等の矯志社も何彼と注視の的となつた。

江藤新平の佐賀の乱に次いで、明治九年には、熊本の神風連（しんぷうれん）、更に前原一誠が萩に旗挙げすると云ふ風で、天下の風雲愈々（いよいよ）急となつた。

其（その）動機や手段、目的に多少の相違はあつても、大体に於て、君側（くんそく）の奸を一掃し、国政を刷新することにあつた。

官憲は血眼となつた。矯志社に対する官憲の疑惑は遂に爆発し、政府顚覆の陰謀をなすものと決めて終つた。

一日自分どもは、近郊に兎狩りに出かけた。社員の留守を見計つて、家宅捜査をした。空巣狙ひをやつた訳だ。さうして盟約書其他の文書を押収した。

その中に「一、大久保を斬る事」と言ふ文書や、政府顚覆に関する計画書などがあつたのだ。

自分は、急を聞いて帰り、いかに警察でも人の留守を狙つて家宅捜索をするとは怪しからんと、署長の寺内とか言ふのに会つて厳談したが、肝腎の、文書を押収されて居るので致し方なく遂に下獄した訳だ。自分を初め、大倉周之助、林斧助、進藤喜平太、宮川太一郎その他十数名、国事犯の嫌疑で、福岡監獄に収監された。

然るに、十年、西南戦役が起るや、自分等も大西郷一統と一脈相通づる者として、内外相呼応することを恐れ、自分等十数名は福岡監獄から長州萩の牢へ移された。警戒された訳だが、これが為、却つて長州では格別の優遇を受け、修錬にもなつた。而して在獄一年、前述べたやうに、十年九月には出獄したが、大風一過の後であつた。こんな風で到頭、大西郷の風格に親しく接する機会を失つたが、其烈々たる、忠君、愛国の至誠はよく心魂に徹してをる。

願留魂魄護皇城

朝蒙恩遇夕焚坑（朝（あした）に恩遇をこうむって、夕べには焚坑せらる。）
人世浮沈似晦明（人世の浮沈は晦明（夜と昼）に似たり。）
縦不回光葵向日（たとい光を回らさざるも、葵は日に向かう。）
若無開運意推誠（もし開運なくも、意は誠を推さん。）
洛陽知己皆為鬼（洛陽の知己、みな鬼となり（死者となり）、）
南嶼俘囚独窃生（南嶼の俘囚、独り生を窃（ぬす）む。）
生死何疑天附与（生死何ぞ疑わん、天の附与なるを。）
願留魂魄護皇城（願わくは魂魄を留めて、皇城を護らん。）

一誦、惻々として、人の心魂を打つ。これは、大西郷が流罪で沖の永良部島へ流され、例の大西郷の心友、川口雪蓬老と、詩や書の研究をしてをつた時代の詩だ。

大西郷の詩は、誠に天真流露でいゝが、書も亦、仲々いゝ。奔放自在、雄渾な書風は又一種常人の真似の出来ぬ風格がある。出獄後の自分共は、愈々身を挺して、廟堂の廓清と、国

威の発揚に尽さねばならぬと決心し、大いに同志の糾合に努め、福岡の向ふ、向浜に向浜塾を開き、講書、錬武を毎日の日課とし大いに励んだ。

するとその翌年、大久保甲東（利通）は石川県の島田一郎等に暗殺された。之で大事が今にも起きるやうな気もしたので、自分は土佐に板垣を訪ひ、蹶起の意志なしやを糺したが、別段のこともなかつた。

土佐から帰つた十二年の暮、自分は同志、松本俊之助、吉田震太郎、浦上勝太郎、伊知地迂橘等の四人と一緒に、かねて憧憬してをつた南洲翁の故山を訪ねた。

無一文で、福岡から鹿児島まで歩いたのだから、仲々、元気なものであつた。

直ちに大西郷の旧宅を訪ふた。前に述べた、西郷が沖の永良部島流罪中の知己、川口雪蓬老が、大西郷の死後もそのまゝ居残つて遺児の訓育に当つてをつた。

雪蓬老は、白髯を蓄へ、眼光炯々として犯しがたい風丰であつた。

来意を告ぐると、雪蓬老は仲々慇懃に応対してくれ、

「遠路わざ〳〵お出下さつたが、鹿児島は今では大木の伐り跡と同然、何にも御覧に入るゝものもない。此間まで、天下有用の材も茂つてをりましたが、今ぢや伐り倒されて、まるで

禿げ山も同様であります。これから苗を植ゑつけても大木になるのは容易なことではない。殊に大西郷程の大木は何百年に一本、何千年に一本出るか出ないか判らない程のもので、誠に残念なことをし申した」

と、如何にも残念さうに暗然としてをつた。

此時、雪蓬老から大西郷愛読の、大塩平八郎の『洗心洞箚記』を借りて来たのだ。

『洗心洞箚記』は大西郷が幾度も幾度も繰り返し、余程愛読したものと見え、摺り切れた処へ大西郷が自ら筆を取つて書き入れたり、紙の取れた処があつたりしてをつた。大西郷、愛蔵の大塩平八郎の書幅も見せて貰(もら)つたが、物に頓着せぬ大西郷が、此(この)書幅の表装だけは仲々立派なものであつたのを考ふると、大塩中斉には、余程傾倒してをつたものと見ゆる。

征韓論の真相

大西郷は征韓論に破れたとよく言ふが、さう言ふ訳ぢやない。あの頃、日本政府が欧米諸国に脅かされてをるのを見て、韓国では、日本を西洋の奴隷の如く心得、西洋の奴隷に韓の

国土を汚させる訳にいかんと言ふので、例の大院君が、

「日本人は洋人と交通し、夷狄の民と化したるを以て、自今日本人と交るものは死刑に処す」と言ふが如き、無礼の排外令を出し、あまつさへ、在韓日本人全部の引上げを要求したのぢや。

そこで、大西郷が、出かけて行つて判るやうにすると、意気込んだのぢや。彼の頃の人物、木戸も岩倉も三条も相当のものだが、議論では板垣（退助）が一番傑出して居つた。板垣の意見では、岩倉や大久保などの西洋かぶれの意見に対し、「近い隣同志の国の始末さへつかんのに、西洋の真似ばかりすると言ふことがあるか。先づ以つて、近い隣り同志の、韓国や支那との折合ひをつけにやいかん」と言ふのだ。大西郷も全くこれと同意見ぢや。但しロシヤの南下は手厳しくやつつけねばならぬと言ふのであつた。さうして、韓国や支那とは仲よくしようと言ふのぢや。

併し西郷の言ふ通りに、若し西郷を韓にやつたらどんなことになるか判らん。是非、西郷が行くと言ふなら、護衛の名義で兵隊を附けてやらう、と言ふ意見もあつたと言ふが、大西郷は笑つて、

「兵隊など附けて貰ふても、おいどんは戦は下手ぢや。なんの、韓国位に出かけるのなら、

Ⅱ　立雲談叢

自己を語る

立雲という号

俺は、人などを送つたり、迎へたりせぬ奴ぢや。

然(しか)し、三浦（三浦梧楼）が朝鮮で、王妃事件（閔妃殺害事件）の為めに牢に入れられるやらして、帰つて来ると云ふから、あの時はどこまでか迎ひに行つた。

佐々友房や、井上角五郎やら一所であつたが、三浦は俺の行つた事を特に悦んだ。

其後(その)いつであつたか。俺の号の立雲といふのを、どう云ふワケかときくから、ワケと云ふ

程のことはない、唯、いつも「フリ〇〇」で、雲の上に立つて居るつもりぢやと云つたら、三浦が、「フリ〇〇」は面白い、「フリ〇〇」はよいと云つてヒドク感心した。

俺は若い

俺は若い。
まだ赤ん坊ぢや。
赤ん坊に、白髯の生えたやうなものぢや。

水泳ぎ

水泳ぎは、子供の時から好きぢやつた、少々の年長者よりは、能く無鉄砲な泳ぎをした。十一の時、近所の十三位の児と一所に浜に泳ぎに行つた。俺は先に飛び込んで、跳ね廻つたが、年上の児は泳ぎを知らんと云ふので這入らぬ。

よし、俺が泳がせてやる、と云つて無理に連れ込んだ、処が実は自分の泳(およぎ)が出来て居ないくせに、年上の大きな者に抱き付かれて居るものぢやから、いくら力を出して泳いでも不可(い か)ぬ。

二人とも溺れ死にそうになつた、これはと思つて連(つれ)の手を離して、やつと俺一人上つた。上つたものの連(つれ)を見ると、だん〳〵溺れ死にそうになつて居る、これはいかぬ、俺が無理に引込んで置いて、殺しては、俺もどうせ死なねばならぬ、どうせ死ぬなら一所に溺れて死なう。

即座に決心がついたから、又飛び込んだ、そして其奴(そやつ)の手を取つて、背にかついで、めくら滅法にバタツイた。

無我夢中でやつた、すると、ひよいと蹴つた足が砂に付いた、それに元気付いて、やつと浜に辿りついた。

其(そ)の時、少しでも躊躇したら、二人とも助からなかつたね。

俺の子供の時分

俺の子供の時分は、不可ぬ奴ぢやつた。親の言ふ事も聞かねば、兄なぞをいぢめつける様な始末で、殆んど我儘の仕放題ぢやつた。

大抵な嫌はれ者ぢやつた。然し親父丈けは大変俺を可愛がつて、言ふても迚も聞かぬから、やる様にさして置けと云つてほをつて居いた。

まだ士族とか云つて、威張つて居る時代で、西瓜の切り売りなどを買つて食ふのは乞食かなどのように云ふて居つた。それを俺が是非食ふと云ふ、許さなければ黙つて摑んで食ふと云ふ風ぢやから仕方なしに買食ひを許した。

菓子でも、菓子屋の前に立つて、食ひたいと思ふと誰が何と云つても摑んで食つた。内でも手の付様がないから、通帳を遣つてね、俺が食つた丈け付けて置いてくれと云つて菓子屋にやつてあつた。

嫌な事と来たら、見向きもしなかつた。然し学問は兄なぞにも、やらにや不可ぬ位に云つ

て俺が勧めた位で、自分の気に入つた学問は可成りよく覚へた。

七つの時に、親父や兄なぞと一緒に、水土烈伝の講談を聞きに行つた。水戸の浪士が、桜田門外で井伊大老を討つ講談で、非常に面白かつた。家に帰つて丁度聞いた通り一字一句も違はさずやつた処が、親父なども驚いて居つた。

好きな書物はよく読んだ。記憶力は良かつた様ぢや。十二三位までは殆んど我儘一点張りで、人の物は我物、我物は我物と云つた風ぢやつた。

十四の時に『論語』を読みよつたら、子曰く「道に志して悪衣悪食を恥ずる者は、未だ与に議するに足らず」とか云ふ事が書いてあつた。これはひどく頭に響いた。

それから我儘をがらりやめた。自分の物も人にくれるようと決めた。悪衣悪食宗に宗旨代えした。それ迄は甘い物でも、家内中のを一人で取上げて食ふと云ふ風ぢやつだが、一切反対にやることにした。

雪の降つて積つてる中に、頬杖どもついて、雪の中に寝転んで、他所で琴を弾いて居るのなぞ聞いて居つた事もあつた。

十五六まで、瀧田と云ふ学者の塾に通つた。其の時の年長者仲間に栗野（子爵）平賀（大坂の

（附）　頭山満先生

夢野久作

一

諸君は頭山満といふ老翁さんの名前を、時々新聞で見たり、話に聞いたりされるであらう。同時にその頭山満といふ老翁さんが大変に偉い人である事も知つて居られるであらう。

しかし其の頭山先生が第一に「ドンナ風に偉い人か」、第二に「何様してソンナ風に偉くなつたのか」、第三に「どんな偉大い事をした人か」と云ふやうな事をハツキリ知つてゐる人は余り無いであらうと思ふ。

ホントの事を云ふと、さう云ふ筆者も頭山先生の偉い処を一から十のドン底まで知り抜いてゐる訳では無い。たゞ何度も〳〵頭山先生にお目にかゝつたり、人の話を聞いたりしてゐるお蔭で、普通の人よりもイクラか余計に知つてゐるだけの話である。

ところで頭山先生の事を書く前に、何よりも先に、お断りして置かなければならない事は、頭山先生が、諸君の知つて居られる豊太閤とかナポレオンとか云ふやうな英雄、豪傑なぞの偉大さとは、まるで違つた意味の豪さを持つて居るのである……と云ふ事である。頭山先生の尊とい処は東郷元帥、乃木大将、荒木大将なぞ云ふ人の尊とい処と、聊か違つてゐる……といふ事である。

それがドウ違つて居るかと云ふ事は、これから先の伝記を読まるれば自然とわかる事であるが、何よりも第一に大変に違ふところが一つ在る。それは外でも無い。

頭山先生以外の偉人とか豪傑とかの伝記を読んでゐると、少年諸君ばかりでなく筆者自身のお手本になりさうな事がイクラでも出て来る。すこしでもいゝから、そんな人々の真似を少年諸君がやつて呉れるといいがなア……と思はれるやうな感心な、立派なことが続々と出て来るのであるが、この頭山先生の伝記に限つては正反対に、少年諸君が真似をしてはイケナイ事がイクラでも出て来る。そこが、ほかの偉人豪傑と頭山先生の違ふところである。

こんな風に云ふと、「それならば頭山先生は悪いことばかりして豪くなつた人か」と諸君は早合点されるかも知れないが、決して左様では無い。

それならば何故頭山先生の真似をしてはいけないのか。さうして頭山先生は、そんな風に他人のお手本にならないやうな事ばかりしながら、どうして、そんな偉い人になられたのか……それは左に掲ぐる頭山先生の稚少時の逸話を読めばわかる。

頭山先生の幼少い時の名前は筒井乙次郎と云つて、安政二年四月十二日に福岡市西新町の筒井亀策といふ人の第四番目の子供として生まれた。頭山といふ苗字は此の乙次郎少年が、後に頭山家へ養子に行つてから名乗つたものである。

翁の生まれた家は今でも福岡の西新町に在る。西新町の警察署に近い大きな楠木の立つて居る家がソレで、そこいらの人に聞くと叮嚀にお辞儀をして教へて呉れる。

翁のお父さんの亀策といふ人は元来、福岡藩の百石取りの馬廻役と云つて、武士の中でも可なりの貧乏な家柄であつたらしい。お母さんの名前をおいそと云ひ一番の姉さんがおさき、その次の長男の兄さんが亀来君、その次が正次郎君といふ兄さんであつた。つまり乙次郎少年は一番末ツ子の三男坊で、家中から「乙しやん〳〵」と可愛がられて育つたものであつた。

ところが此の三男坊の末ツ子の「乙しやん」はだんだんと大きくなるに連れて、普通の子供と違つて来た。第一、とても腕白で家中の者の手に及へないばかりでなく、外へ遊びに出ると其処いら中の餓鬼大将になつて、自分よりもズツト年上の者まで輩下に付けて、大暴れに暴れまはるのであつた。

それぱかりでない。「乙しやん」の腕白ぶりは、ほかの英雄豪傑連中の幼時の話として伝へられて居る腕白ぶりとは非常に違つた処があつた。

「乙しやん」は何処へ行つても、どんな事が起つてもボンヤリとしてヌーツとしてゐた。着物が汚れて居やうが、下駄が切れてゐやうが、又は怪我をして血が流れてゐやうが平気の平左のクリ〳〵坊主で、鍛冶屋の店先へ突立つて、何時までも〳〵トツテンカン〳〵の音を聞きながら見惚れてゐる。そのうちに飽きてしまふと何処かへフーツと行つてしまふ。近頃流行の言葉で云へば、「乙しやん」は何処から見ても間違ひの無いヌーボー式少年であつた。

こんな事がある。

乙次郎少年が、まだ十歳にならない時分の寒い〳〵冬の日の事であつたと云ふ。家の人から十銭のお金を貰つて蒟蒻を買ひに遣られた。その頃はまだ物の値段の安い頃の事で、蒟蒻なんぞは二三銭も買へば山のやうに来る時代であつたので、多分五厘か一銭がトコ買つておいでと云はれたのであらうが、向ふの店へ行つて乙次郎少年がヌーボー式に黙つて十銭の金を出すと、蒟蒻屋のおやぢが意地の悪い奴か何かであつたらう。氷のやうな水の中から十銭がトコの蒟蒻を数へ出して、土間へ山のやうに積み上げた。さうして乙次郎少年を振り返つて、

「何か容物をば持つて来なさつたな」

その時分の習慣としては十や二十の蒟蒻なら藁へ突きつないで持つて帰ることになつたので、むろんソンナに沢山の蒟蒻の、容物なんか持つて来てゐなかつた。

しかし乙次郎少年は驚かなかつた。相も変らぬヌーボー式に黙つて自分の着物の懐中を開いて、「此処へ入れて呉れ」と云ふ風に指して見せた。さうして蒟蒻屋の親爺がアベコベにビツクリして居る眼の前で、その冷めたい〳〵切れるやうな水だらけの蒟蒻を片端から自分の懐中へ摑み込んで悠々と帰つて行つた。「乙しやん」のヌーボー式は馬鹿か豪傑かわからなかつた。

まだある。

「乙しやん」が八ツか九ツの悪戯盛りの時代に、福岡県の嘉穂郡の山本と云ふ家に養子に遣られた

事があつた。しかし養子に行つても自家に居つても、「乙しやん」のヌーボーとした腕白はチツトモ変らなかつた。ヌーツとしてボーツとしてゐながら、何時、何処でドンナ事を初めるやらわからないので、山本家の人々は皆、驚いて閉口してゐた。

その山本といふ家の近所にお寺があつて、大きな柿の木があつて、お美味さうな赤い実がドツサリ実生つてゐたが、その寺の和尚さんが八釜しいので、近所の子供は怖がつて誰も喰ひに行く者が無かつた。

しかし「乙しやん」は平気であつた。毎日々々、真昼間から堂々とその柿の樹に登つて、手当り次第に柿の実を喰ひ散らすので、和尚が非常に腹を立てゝ、或る日の事、「乙しやん」が柿の樹の絶頂に登つてゐる処を見澄まして、柿の樹の下に忍び寄つて、大きな幹に両手をかけて力一パイゆすぶり出した。

しかし、それでも乙次郎少年は平気であつた。ニユーツと木の空に立上りながら、左手でシツカリと樹の枝を握り、右手で前をまくつてシヤア〳〵と小便の雨を降らせ初めたので、和尚は坊主頭を抱へて逃げて行つたといふ。そんなアンバイで乙次郎少年が、あんまりヌーボー式に無鉄砲なので、山本の家でもタウトウ降参してしまつて、モトの筒井家へ送り返して来た。「乙しやん」も平気な顔で、黙つてヌー、ボーとして帰つて来た。

とにかく、馬鹿だか豪傑だかマルキリわからないのが、乙次郎少年の特徴であつた。

筆者は少年諸君に「乙しやん」の真似をして悪戯をして、ヌーボーとして貰ひ度い為に此の話を書くのでは無い。後の頭山満翁になつた「乙しやん」が、かうして生まれながらに底の知れないくらゐ気持の大きい、何が来ても、何と言はれても驚かない、ヌーボーとした性質を持つてゐたことを知つて貰ひ度い為にこんな例を引いてみたのである。

これは真似をしたとて何にもならぬ。真似はどこまでも真似でホンモノでは無い。

後の頭山満翁の「乙しやん」は生まれながらにしてコンナ風に、底の知れないほど強い、大きい、シツカリした心を持つた偉人であつた。さうして、そのまんまにヌーボーと大きくなつて、上は代々の総理大臣から、下は日本中の生命知らずの壮士や無頼漢からまでも恐れ、敬はれながら、自分がソレ程のエライ人間であることをチツトモ知らないまんまに、普通の人間と同様に親孝行をして、老人や子供を可愛がつて、チツトモ威張らないで弱い者の味方になつて来た人である。さうして自分でも自分のさうした豪いところを何とも思はないまゝ、ヌーツとしてボーツとして八十幾歳の今日まで悠々と長生きをして来た人である。

だから頭山先生の伝記の中で、少年諸君が真似をしていゝ処はタツタ一つ、此の「自分のエラサを知らないで、平々凡々に忠孝の道を履み、他人に親切をつくして来た」といふ立派な心だけ……と云つてもいゝであらう。

それを知らないで、たゞ無暗にエラクなり度い、又はエライ人間に見せかけ度いばつかりの詰まら

ない人間が、われも〳〵と頭山先生のヌーボーの真似をしたとて、頭山先生のやうなエライ人間になれる筈が無い。

だから諸君は此(こ)の「乙しやん」の真似をしたつて駄目である。それよりも頭山先生のやうに自分の豪(えら)いところをチツトも豪いと思はない。心から平々凡々に神様を敬ひ、天子様に忠義をつくし、親孝行をし、弱い人間や、つまらない人間に親切をつくして行く方が早道である。さうすれば頭山先生とは違つた、諸君の持つて生まれたエライ処が、それ〴〵精一パイに世の中に現はれて行くであらう。

此(こ)の道理がわからなければ頭山先生のエライ処はわからない。頭山先生の伝記を読む必要は無い。否。面白がつて真似をするだけの目的ならば、此(こ)の伝記は少年諸君に読んで貰(もら)はない方がいゝ位である。

ところで頭山先生の乙次郎少年は、そんな風に気が大きくて、ヌーツ、ボーツとしてゐた。馬鹿だか、弱虫だか、わからなかつたので、よく近所の腕白小僧連中が此(こ)の「乙しやん」を馬鹿にしてイヂメに来るのであつた。

もちろん「乙しやん」よりもズツト年上の連中が多かつたのであるが、しかし「乙しやん」はビクともしなかつた。平気な顔で自分を打つたり蹴つたりする連中の顔を、地ビタに寝ころんだまゝジロリ〳〵と見てゐる。泥だらけになつても、着物が破れても平気の平左で、怪我をしても瘤(こぶ)が出来ても痛いやうな顔一つしない。さうしてソンナ腕白連中が、いゝ加減に殴りくたびれ、イヂメくたびれ

て引上げやうとすると、今まで何の手向ひもしないまゝヘタバつてゐるかのやうに見えた「乙しやん」がムツクリと起上つて、その腕白連中の中でも一番強さうな奴に向つて摑みかゝるのであつた。しかも、それが又トテモ落付き払つたシツカリした摑みかゝりやうで、腕力が底抜けに強い上に、蹴られても殴られても、喰ひ付かれてもビクともしない頑張りと来てゐるから、最前からクタビれてゐる腕白連中は一も二もなく地ビタに押し伏せられて降参させられてしまふのであつた。さうして一度降参させられたら、モウ二度と「乙しやん」の前で頭は上らない。明日からみんな「乙しやん」の乾児になつてしまふのであつた。

これは頭山満翁の子供の時分の話であるが、かうした「乙しやん」の持つて生まれたエライ処は、今日になつても変つてゐない。

今の日本国中のドンナに豪い人物でも、どんなに乱暴なゴロ付までも決して頭山満翁を軽蔑しない。ニコ〳〵してゐる翁に一睨み睨まれるとビクツとして小さくなつてしまふのは、翁の子供時代から続いて来た、さうした威光に打たれるからである。「此の人には敵はない」と一目で思はせられてしまふからである。

又、現在、頭山翁の乾児と名乗つて、翁の為に生命を棄てやうとする者がドレ位、居るかわからない。印度や支那にまでソンナ人物が大勢居るらしいのであるが、そんなのは皆、翁の方から進んで喧嘩を吹つかけたり何かして恐れ入らせたのでは無い。向ふから翁にぶつかつて来て、恐れ入つてしま